

「ゆめポッケ」



3

配布の現場はいま

レバノンではまず、首都
ベイルート市内にあるシヤ
イーラ難民キャンプを訪れ
た。1980年、イスラエル
軍によって多くのパレスチ
ナ人が虐殺された場所でも
ある。その「大虐殺現場」の
通りから細い路地に入った
らで、一人の少女に出会った。

業機関）の運営する高校に通
っているという。「外科医に
なるのが夢でした。パレスチ
ナ人であるためにそれは叶い
ません」。16歳の少女の口か
ら淡々と語られるパレスチナ

祖国

サマル・アリ・キラニさん、16歳。現在、UNRWA（国連パレスチナ難民救済事



厳しい難民生活を強いられたながらも、サマルさんはパレスチナの将来についてしっかりとした口調で語った（シャティール難民キャンプで）

祖国へ帰りたい

にイスラエルが建国されたことによつて、祖国・パレスチナを追われた人々のこと。現在、中東諸国を中心に約400万人が難民として暮らす。半世紀を経てその多くを「難民」の世、3世が占めていゝのは言うまでもない。

強ができ、希望する仕事に就けるといふ人間としての当たり前の権利が与えられること。パレスチナ人の置かれている状況が、世界中の人々に正しく伝えられることです」

同国内には現在、12の難民キャンプが設置されている。

レバノンのパレスチナ難民とシリア、ヨルダンなど他国で暮らす難民の生活は、基本的人権の保障という面で大きな

どのキャンプでも、家族と食卓を囲んだり、隣人とおしゃべりを楽しんだり、子供の成績に一喜一憂したりという場

け取ったというハンマド・ナセル君(11)の自宅を同キャンプに訪ねた。キャンプで生まれ育った父・マシムッドさん(42)は、82年のイスラエル侵攻の際、頭部を銃で撃たれ、体に障害が残っていた。十分に働くことができないため、一家7人の暮らしは非常に厳しい。マシムッドさんは日本からの支援に感謝を表した後、「両親の生まれたパ

した。どこの国にもありそうな

ふと、サマルさんの言う「**マ**母・エルハムさん(37)も祖國に寄せる深い思いに大きくうなずいた。

「祖國」を語るときは彼らの表情に、今の暮ろしが決して「日常」ではないことを思い知らされる。

また、ある女性(35)は、現在、在の暮ろしを「自由のない、刑務所のような」と例えた。看護師の男性(21)は、「パレ

同国南部に位置するアル・スチナに帰れば、生活のすべ
てが満たされるのに。パレス

45分ほど車を走らせれば、イ
スラエル——彼らの祖国・パ
レスチナとの国境にたどり着
く。以前「ゆめポケット」を受
け、敵意をあらわにした。

レバノン